

灯の軌跡

— 芦屋市立図書館の14ヶ月 —

図書館年報46周年記念号

[特集] 阪神・淡路大震災の記録

芦屋市立図書館

芦屋市伊勢町12番5号

電話 0797-31-2301

震災文庫

8

198

阪神・淡路大震災の
あと物心両面の励まし
をお届けくださった
すべての人に捧げる

00096123442

寄贈



震災文庫 8 - 198

目次

はじめに	1
第1 「激震と激動」 -平成7年1月-	2
第2 「再生の芽を萌え出させる」 -平成7年2月-	6
第3 「感動の春 本館再開」 -平成7年3月-	9
第4 「図書館運営復元への道のり」 -平成7年4月・5月・6月-	11
第5 「崩壊の時は創造の時」 -平成7年夏(7月・8月)-	16
第6 「稔りの秋を迎える」 -平成7年秋(9月・10月・11月)-	18
第7 「静かな画期」 -平成7年12月-	21
第8 「一周年のメモリアル」 -平成8年1月-	23
第9 「禍を転じて福となす」 -平成8年2月・3月-	27
あとがき	31

はじめに

崩壊の悲劇の底から立ち上がる営みは、市民と支援者に困難をもたらした。反面、希望を生み出した。芦屋市民及び行政機関の自助努力と、全国からの無私な援助が、復興の原動力であった。その中で、避難所を受け持った機関・施設もまた、市民・本部と心をつなげて活動すべき地域拠点であった。一つ一つのサテライトが、芦屋市を代表して活動を続けていた。

人々の大海の中で、それぞれに課せられた任務を遂行してきた記憶は、必ずや今後の災害対策と、日常行政に役立てられる。その記憶の基本線を再現して、数ある震災記録の一端に付け加えるために、この冊子は編まれたのである。過去の体験を大切にすることが、将来の展望を確かなものにするのである。

第1 「激震と激動」－平成7年1月－

1 1月17日

(1) 5:46 揺れる

震動とその結果が、道一つ隔てただけの所で、海と山ほどにも食い違ってしまふ、という状況だったので、当初、事態の深刻さに気づかなかった市民があるのも、やむを得ないことであったが、事態は深刻であった。図書館職員も、人身と住居に被害を受け、その処理に追われながらも、どうかして職場にたどり着き、あるいは職場に向かおうとしていた。

一人の係長は、全壊した自宅の下から脱出し、家族を救出した後、着の身着のまま職場に到着した。他の係長は半壊家屋から脱出後、近隣に住む母親を全壊家屋の中から救出した後、最初に職場に到着した。3人の係長と、比較的近隣に住む数人の職員が、駆けつけてくれた。館長は遠方のため、13:00 によやく図書館に到着することができた。

(2) 1月17日の流れ

ア 激しい揺れとその他の状況から、第3配備（全職員出動指令）と推定。

イ 朝、社会教育機関全体に「臨時休館指令」出される。

ウ 出勤できた職員が、とりあえず足場の片づけと本部連絡、状況把握と未到着職員への連絡等の業務に従事。

エ 社会教育部長に図書館被害状況の概略報告。

オ 17:00 芦屋市立図書館に、避難所設営の特別指令出る。

カ 19:00 ぼつぼつ避難してくる人あり。

17日中に83人の入居者あり。入居確認のため、入居者自筆のサインによる入居者名簿を作成。

キ 即日、避難所日誌を記帳し始める。以後これを、当番勤務者の任務とする。

ク 22:00 「徹夜で避難所運営に当たれ」の指令届く。翌朝5:00まで、1時間ごとに安全チェック巡回実施。

2 1月18日－22日

(1) 勤務体制

1月18日から22日まで、管理職4人を中心に夜間勤務体制を確立。他の数人の職員がこれに加わる。初めの数日間は、食糧配給不十分で、勤務職員にまで廻らなかった。

(2) 日毎の出来事

ア 18日

* 5:00公衆電話つながり始める。

* 6:00総務係長が職員に連絡をとり続ける。「小・中学校で給水中」の広報

車まわるのを聞く。

- * 6:50水を受け取りに行く。
- * 社会教育部長に、図書館の被害状況を文書で報告。
- * 勤務者は、管理職職員のほかに5人。
- * 避難所入居者 112人を数える。エントランスを物資配給スペースに、児童開架室を物資倉庫に定める。
- * 近隣自治会と銀行社宅から食糧の差入れあり。職員2人も差入れ品持参。

イ 19日

- * 避難所、全市で52箇所、21000人、全市民の4分の1弱。
- * 災害対策本部の「お知らせ」発行され、近隣住民への配布用に届く。
- * 仮設トイレ配給される。バキュームカーくる。
- * 不審人物3人をチェック。
- * 「図書館24時間文庫」を開設し、入居者用に児童書と雑誌の閲覧を始める。
- * 職員の差入れあり。

ウ 20日

- * TV番組から有用情報を選んで、掲示板に掲出。
- * 環境サービス課によるゴミ収集作業再開を知る。
- * 職員の差入れあり。

エ 21日

- * 掲示板を用いて、入居者向け伝言サービス始める。
- * 入居者ピーク、116人に達す。
- * 医師会の医療班巡回始まる。
県庁調査班、来始める。
- * 灯油ストーブ2台入手。
業務用電話復旧。
- * 阪図協事務局（阪神地区公共図書館協議会、平成6年度当番尼崎市）から図書館被害状況の照会あり。後刻、阪神間被害状況について報告あり。それにより、一覧表を作成。

オ 22日

21日と同様の状況続く。

3 全職員勤務体制

1月23日に到り、基本的に全職員による勤務体制確立。

通勤の困難性と夜間勤務者の確保を考慮して、次の3タイプに分類。

Aタイプ=48時間勤務。

Bタイプ=24時間勤務。

Cタイプ=日勤。

このあと、状況に応じて72時間連続勤務を取り入れるなど、柔軟に対応した。

4 1月中のその他の動き

(1) 職員会議

1月28日、職員会議開催。長期災害対策従事の方針を徹底。あわせて、図書館再開へ向けての心構えを確認。

(2) 状況把握の努力

全市の実情が把握できなかったこと、本部の状況と本部からの指示が把握できなかったことのため、本部へ出向き、その往還に市街の状況を視察。

(3) 入居者への情報提供

入居者に対し、避難所生活への協力を求め、又、情報を提供するため、「図書館避難所 生活情報新聞」を発行。(通算5号まで。)

第1号(1月24日)「共同生活ルール」

第2号(1月25日)「健康管理」

第3号(2月3日)「共同生活情報」

第4号(2月15日)「温泉旅行招待」

第5号(2月27日)「共同生活マナー」

(4) 視察・見舞

* 市長、県会議員、教育長。

* 日本図書館協会理事長。阪図協事務局。

(5) 整理作業

* 27日以降、大原分室の整理作業に取りかかる。

* 28日以降、事務室の整理作業に取りかかる。

(6) 炊出しボランティア

青森県八戸市の市民自治創造グループ「八戸コミュニティボード」が呼びかけた「八戸市民ボランティア会」の救援隊第1陣が、1月27日-31日の行程で来芦。(以後第4陣まで来援し、芦屋市立図書館を拠点に救援活動を展開。)

1月29日の炊出しで、図書館避難所入居者は始めて暖かい食べ物を口にする。

(以後だんだんと炊出しボランティアが来るようになる。)

第2 「再生の芽を萌え出させる」 ―平成7年2月―

1 災害対策本部と他の避難所へ職員派遣

ア 大原集会所 (1.29-)

大原集会所避難所へ、副管理責任者として係長を派遣。大原集会所には、図書館大原分室があり、再開条件を見きわめるためにも、管理職職員を派遣して、共同運営に当たってもらったのである。

イ 精道中学校 (2.2-)

学校避難所は要員不足に悩んでおり、人事課の要請を受けて派遣することとした。

ウ 本部運転要員 (2.19-)

災害対策本部は、各種機能をリアルタイムで作動させる必要に迫られているとのことで、広報宣伝車を中心に運転業務に従事すべく派遣した。

2 書架整理

本館・分室とも、一部書架が倒れ、ほとんどの図書が散乱していたが、その激しさに驚き、又、当初の避難所運営に忙殺されて、1月中は放置状態であった。2月にはいると、図書館職員グループ（図問研グループ、アジア図書館など）のボランティアが来援し始めた。5日と6日を皮切りに、ときには一般ボランティアも加わって、精力的な作業が繰り広げられ、芦屋市立図書館職員もこれに励まされた。このころ散乱した事務室の整理作業も並行して続けられた。図書館界の共助に感謝している。

3 避難所文庫の提供

東京都文京区立図書館、京都フィールド・ソサイエティ・グループなど、多くのところから、寄贈本が届き始めていた。

日々の生活に追われる避難所ではあったが、すでに自発的に雑誌などが持ち寄られていることから判断できるように、当初から読み物に対する需要は潜在していたのである。幸い図書の寄贈は、図書館に集中された。これを計画的に、敏速に避難所文庫として届けることが、図書館の任務であった。

〔第1弾・第2弾〕2月18日 精道小学校避難所、精道中学校避難所

〔第3弾〕2月22日 岩園小学校避難所

以下、兵庫県立芦屋高等学校、海技大学校、市民センターの各避難所に、都合6000冊の避難所文庫を贈ることができたのである。

4 避難所運営を軌道に（情報提供と自主運営）

(1) 避難所入居者には、即刻、生活物資の提供と並んで、各種情報の提供が必要

であった。掲示板を活用して災害情報を伝え、個人連絡に伝言票を掲出するサービスは、当初から実施していたが、これに加えて、図書館避難所独自の新聞を発行することにした。

「生活情報しんぶん」1～5号（再掲）

第1号（1月24日）食糧、水、トイレ、ゴミ、電話などの生活情報

第2号（1月25日）避難所生活における健康管理

第3号（2月3日）避難所運営のルールとマナー

第4号（2月15日）温泉一泊バス旅行お知らせ

第5号（2月27日）避難所の運営

（2）世話人会

隣接町の自治会会長さんのご協力があって、入居者の世話人会が発足した。世話人会は、2月中は21日と25日、その後も継続して必要に応じて開催され、図書館側との連絡調整や、避難所経営への参画に貢献していただいた。

5 停電

2月24日、18:35-18:55 芦屋から西宮にかけて広い区域で停電があった。あとから思えば僅か20分間ほどのことであったが、余震の恐怖の覚めやらぬ時期、あたり一帯が真っ暗な中に置かれた人々の気持ちは、どんなであったか。

自家照明装置が自動的に働き、付近一帯では芦屋市立図書館のみが輝いていた。留守番をしていた子どもたちを含めて、人々は図書館に駆けつけた。公共施設のあり方について教訓を与えてくれる印象的な出来事であった。

6 図書館再開計画協議

ア 阪神間で次々と図書館が再開していくのを見ながら、一部分でも、分室だけでも、全く営業できていないのは芦屋のみ、という事態に遭遇しようとしていた。

利用者からの再開への照会と要望は、日増しに増えていた。3月初めにはガス・水道が復旧する見込みが立っていた。

イ 「震災により返却不能となる図書の取扱い」「紛失貸出券の即時再発行」「一時的に芦屋に居所を有する人への特別貸出」「予約図書の連絡方法」等々、震災特別マニュアルが作成された。

ウ 教育委員会としての意志決定の後、災害対策本部会議の議を経て、本館再開方針が確定した。分室・自動車文庫はもう少し先になる。避難所経営は継続していたから、2階スペースをそれに充て、1階スペースの活用をもって、3月8日、本館は再開する。

7 平成7年度予算編成

構図の出来上がっていた平成7年度予算の再編作業が行われた。図書館も全体

第3 「感動の春 本館再開」 -平成7年3月-

1 再会

図書館にとって「再開」とは、懐かしい利用者との「再会」であった。50日ぶりの再会は、新図書館オープン時3ヶ月の準備期間をいただいて以来のできごとであった。

3月8日に先立って、3日には報道機関への情報提供をし、「広報あしや震災復興ニュース」には市民へのお知らせ記事を掲載した。

3月8日当日には、新聞社、テレビ局の取材が相次いだ。27日には、ローカルFM局のインタビューがあり、生放送された。

2階スペースは、引き続き避難所であった。

2 復活

図書館の再開過程を追うようにして、市民グループの方々の協力が復活した。2階の録音室が使えなかったので、録音図書製作グループ「芦笛」は、点字図書製作グループ「点字友の会」の好意により、1階点字作業室を半ば譲ってもらい、両グループとも早々に活動を復活された。

3 芦屋市立図書館協議会

図書館の審議機関である図書館協議会にとっては、平成6年度「新しい図書館像」について諮問を受け、いよいよ答申をまとめようとした段階での震災であった。街全体が混乱と苦難の中であって、委員の方々も被災しながらいろいろとボランティアに携わっておられたが、なんとか答申を完成したいとの熱意を示された。3月18日の専門委員会を経て、年度末ぎりぎりの30日、長期展望に立つ「生涯学習時代の図書館」について答申をまとめ、提出されたのである。

4 こよみ

3.11 八戸コミュニティボード救援第4陣到着。ポリアンサスの鉢植えを配るため、小学校巡回。

3.4 文部省の被害状況調査あり。

3.16 日本図書館協会来館。職員被災状況調査。

3.4 および 3.24 避難所世話人会。

5 資料

(1) 新聞記事95年3月5日朝日新聞

芦屋市立図書館が
8日から業務再開
芦屋市伊勢町の芦屋市立図書館が、8日から再開する。一階の図書室が避難所になっているため、一階の開架室を使って午前10時から五時まで開く。毎週月曜日と毎月が火曜日、祝日は休み。

(3) 新聞記事95年3月9日産経新聞

芦屋市立図書館が再開
400人が読書楽しむ
震災後ずっと閉鎖していた、開館する。
芦屋市伊勢町の同市立図書館が8日から再開した。現在も一階が避難所となっており、当分は一階だけの利用となるが、蔵書に被害はなく、二五万冊の書物が利用できる。この日はさそく、約四百人の市民が訪れて読書を楽しんだ。同図書館の建物にはほとんど損傷はなかったが、書物がすべて床に散乱、ビーク時には百人を超える被災者が避難していた。今後は、二階を使用するスペースや折り紙教室などの行事は延期するが、時間を短縮して一階だけを

(2) 新聞記事95年3月7日読賣新聞

芦屋市立図書館
あすから業務再開
大震災の影響で閉鎖していた芦屋市伊勢町の市立図書館(下橋洋一館長)が、8日から業務再開。開館は本に被害はなかったものの、書庫調査が
駐屯地にひびき入るまで午後五時。休館日は休館している。利用できるのは、月曜日、日曜日の第一火曜日の一部だけで、読者約四十人が訪れている。また、大原町と打出小の書庫調査も開架室が備わっている。避難所に入ると読書はできない。また、開館のめは立っていない。開館時間は午前10時から。

(4) 新聞記事95年3月9日毎日新聞



震災や閉鎖した図書館で自らの本をさがす子供たち。芦屋市伊勢町の市立図書館で

どの本
読もうかな

阪神
大震災

芦屋市立図書館 再開

被災し、散乱した蔵書の整理も済み、開館と近づいた。学校前の小学生や、じょうたんをぬい、なせん、台で絵本を見る幼児ら約四百人がこの日、入館。長男雅太郎さん(七)と七ヶ月の二階へおんを連れて近づく主婦、田代佳子さん(三)は、外は空気が悪いし、公園もデントや車が止めてあったりで、子供の遊び場がなかった。建物の中で遊ぶ所があればと思っていたのでうれしうと語っていた。二階は引き続き避難所として利用される。

(5) 新聞記事95年3月18日読賣新聞

図書館に活気戻る



街の息吹

二千五万冊の蔵書を持つ芦屋市立図書館が再開したのは今月八日。一か月前、閉鎖した本を捜していた市民約八百人がつと再開し、一気に活気が戻った。公園や学校が仮設住宅や避難所になっている遊び場のない子供も児童館集まって、ページをめくる。雨約三十人いる読者の、八階が共有した。

第4 「図書館運営復元への道のり」 —平成7年4月・5月・6月—

1 避難所の終了

入居者がそれぞれに仮設住宅等へ転居することにより（最終5月6日）、避難所の任務終了。

これを受けて、短縮していた本館運営時間帯を、9日から元通りに復元。又、避難所関係物品整理作業ののち、16日から2階スペースも供用開始。

2 震災を記憶する

大震災に遭遇し、被災した人を中心に形成されたミニ・コミュニティ。それが図書館避難所という場で、3ヶ月余に亘って運営されたのである。震災の恐怖とそれに続く不自由な生活、その中で営まれた自助と共助の現実。それを風化させたくないとの入居者の思いがあった。

18日には「震災を語る会」準備会があり、元入居者へのアンケートが配られた。25日に「震災を語る会」が開催され、併せてアンケートが集められた。ともに今後の貴重な資料となるはずである。

3 ストーリーテリング復活

ボランティア・グループの人々の熱意に励まされるようにして、図書館の大切な行事が復活した。毎週土曜日の「お話しの会」「絵本の会」である。5月6日のことである。

4 資料

(1) みんなの本だな2・3・4月合併号巻頭言

◆ 阪神大震災からの復興の中で —図書館の再開— ◆

夢を見ているような、信じたくない世界。時間が流れず、街が呼吸を止めたような感覚。しかし、現実には現実なのであって、人命は失われ、倒壊した家屋は戻らず、残された者には、身体の新陳代謝のリズムが否応なく迫り、夢中で積み上げる不自由な生活。

地震のショックと破壊の圧力の前に、呆然としながらも、家族と隣人の助け合いが始まりました。ご近所ボランティアが明かりを灯しました。コミュニティ・スクールなどの地域組織の救助活動に力を与えたのは、地域社会の日常的な心の連帯でした。

震災後次々に寄せられた、全国からのボランティア……。数え切れない援護の中でも、青森県八戸市からの救援は、最も際立ったボランティア活動の例でした。

八戸市自身が、昨年末の12月28日発生した「三陸はるか沖地震（マグニチュード7.5）」で多大な災害を被り、未だ日常生活や経済面などの痛手から立ち直

れない時期にもかかわらず、「傷の浅い者が、深傷（ふかで）を負った人を助けるのは当然だ。」と決意され、交通事情の厳しい中、遠路、3回にわたって「芦屋」を見舞われました。回を追うごとに、わたしたちの生活の実態、避難を余儀なくされた人々の気持に添う活動をされたのでした。

3回目の来援時と、その後も届けられた鉢植えの花「ポリアンサス」は、市内の9つの小学校と芦屋市役所、そして私たちの図書館で匂いたち、語りかけてくれています。

『美しい町、芦屋市のみなさんへ』。

このようなボランティア活動が実現したのも、八戸市のコミュニティづくりグループ「八戸コミュニティボード」の呼びかけによるもので、日常の市民自治創造の実践が結実した見事な姿なのでした。

1月17日以来、芦屋市立図書館は、災害対策・復興への一拠点として、避難を余儀なくされた方々の生活の場として運営にあたってきました。そしていつの日か、臨時休館の時が過ぎ、再びめぐり会える日のために、いろいろな支援をいただきながら準備をすすめてきました。

この間、数多い皆さんからのお問い合わせがあり、災害対策・準備作業へのご理解を頂いてまいりましたが、芦屋市立図書館への熱い期待を、ひしひしと感じる日々でした。

去る3月8日、引き続き災害対策・復興に取り組み、一部職員を他の災害対策現場へ派遣しながら再会の日を迎えました。わたしたちは、次のようなメッセージで芦屋市立図書館に来られる方々に呼びかけました。

“芦屋市立図書館へ、ようこそいらっしゃいました。ここでの再びの出会いを喜び合いたいと思います。そして、信じられないような不幸に見舞われた方々のことを忘れず、図書館をオアシスとして、本当の心のつながりを創っていきたいと思います。”

日常が非常時を制します。普段の努力の積み重ねが、危機に際して力を発揮します。日ごろのコミュニティづくりが災害時に活かされる姿を、わたしたちは目の辺りにしました。コミュニティづくりを支える一人一人の生涯学習が、芦屋市立図書館を拠点として、より一層推進されることを願っています。

(2) みんなの本だな5月号巻頭言

◆ 阪神大震災から文化の復興へ

～自動車文庫の巡回始まる～ ◆

大震災の発生から嵐のような3カ月半が過ぎ、本格的な復興・建設の日々を迎えています。誰もが信じがたい出来事に遭遇して、人生観・世界観を変えている自分に気がきました。それでもなお、価値あるものには価値があり、継続すべきものはこれを継続すべきことには変わりはありません。

図書館本館は、3月8日から再開しました。少しずつ利用者が増える様子は、阪

神間各市と同じ経過を示しています。

震災発生後すぐに、変わり果てたわが町芦屋を、ビデオに収めるため、歩き始めた人がいます。全壊のわが家の前に立ち尽くす人から撮影を咎められ、そこで対話をしながら、ひたすら撮り続ける。歴史上の大事は、心ある人の、このような目立たない努力から始まるのでしょうか。この作業はやがて、震災との中で積み上げられた、人々の営為を振り返る作品となって、結実することでしょう。

歴史に貴重な1ページが加えられようとしています。図書館はそれを保存する重要な拠点です。芦屋市立図書館は、阪神大震災に関する新聞・雑誌・図書そして「広報あしや震災・復興版」を蓄積しつつあります。

平成5年3月に策定された「芦屋市生涯学習推進基本構想」は、すでにこう指摘しています。

“まちづくりのための英知と活力を生み出す源泉となるような、知識や経験が必要である。”

平成7年度「芦屋の教育～指導の方針～」(芦屋市教育委員会)には、「図書館」の項で、次のように述べられています。“大災害からの復興期にこそ、「まちづくりのための生涯学習」が必要である。相互に理解し合い、助け合うことができる社会関係づくりが問われている。そのような市民文化の形成に寄与する文化情報センターとしての役割を遂行する。”

図書館システムの復興に向けて、自動車文庫の巡回を再開しました。当分の間、従来の28ステーション巡回方式に替えて、北部方面数カ所の重点配車方式とします。人々の生活分布が変わってしまっていること、道路・交通事情が悪くなっていること、分室機能が回復していないことなどを考慮したものです。

本館のみの再開でご不便をかけていましたし、この間多くの問い合わせがありました。これからはぜひ自動車文庫もご利用いただきたいと思います。

(3) みんなの本だな6月号巻頭言

◆ 図書館システムの再生～大原分室の運営再開～ ◆

阪神大震災により、死と混乱に遭遇して、生きるための営みと街の再建の歩みの数カ月がたちました。非日常の世界には、普段は見えにくい人間性の良否両面が映し出されました。

名もつげない市民の方々からも救援物資が届けられました。人命救助にあたった人をすべて知ることは、もう無理かもしれません。「今時の若い者は……」というセリフは、大昔からあったようですが、救援ボランティアに赴いた青年の働きに、賛辞を惜しまない人が少なくないようです。ところが片や、避難所の共同生活や救援物資の配給などのことで、残念な話を聞くことができました。

芦屋市立図書館協議会の委員さんも、震災直後から、近所の人々に自宅の電話を開放したり、井戸水を提供するなどのボランティアに従事されました。平成6年度、協議会は「生涯学習時代の芦屋市立図書館のあり方」について諮問を受けており、

答申のまとめに入る段階で大震災に見舞われました。困難な状況にありましたが、委員の方々は仕上げの作業に精励し、年度末に至って重要な答申を提出されました。そのさい、震災と復興の時期であることを考慮し、次のような「追記」を加えられたのでした。

“答申の概要をとりまとめた段階で、未曾有の大震災に見舞われることとなった。全市民生活、全行政分野、そして芦屋市立図書館運営全体への影響は甚大なるものがある。

芦屋市立図書館が災害復旧対策の一拠点として、目下の急務に従事している中で、本館の業務を再開された努力を多とする。本館機能の一部制約や分室が一定の期間閉室となることは、やむをえないことであるが今後とも災害復旧対策の方向に添いながら、同時に、市民のオアシスとしての役割を果たされることを期待したい。”

わたしたちは阪神間にいてこのたびの危機に出会い、全国の援助を受けました。もしこれをもって「特別扱いを受けている」と批判されるとすれば、まことに不本意なことだと感じるでしょう。同じように、市内でもいろいろと被害内容が異なり、それに応じて対策がとられています。お互いにそれぞれの立場を理解し合い、ともに市民文化の再生に手を取り合えればと思います。

図書館システム復活の拠点、大原分室の運営を6月1日から再開しました。すでに本館も、開館時間を元に戻し、2階閲覧室の利用も再開しています。重点配車している自動車文庫とともにご利用下さい。

第5 「崩壊の時は創造の時」 ー平成7年夏（7月・8月）ー

1 こんな時だからこそ

単に元に復する発想だけでは、再生は不十分となるはずである。

児童図書は書名順に並べられているが、これを一般図書と同様、著者名順に並べることは、かねてから宿題となっていた。いま、児童図書を充実するため、読み物類を重点的に購入したこの機会に、9類「読み物」を書名順から著者名順に配列する作業をやり遂げたのは、この夏である。

この夏は又、有資格者が一人誕生した。震災後の非常時に長期の研修は厳選するという本庁の方針を十分に尊重するとしても、唯一の機会を活かして夏季集中講座に総務係長を派遣し得たことの意義は大きい。司書職専門採用制度によらず、行政職員配置後の資格取得によって、有資格者の構成比率を維持し、高める方策によっている芦屋市にあっては、年1回の機会を活かすことが、極めて大切なのであって、このことに理解を示された人事当局の配慮に感謝したい。学校の夏休みという格別の繁忙期に、職員の熱意と応援に支えられて、実現したのである。この決断の先見性は、その後の年度替わりの人事異動を見ても、はっきりとしている。

2 行事

図書館の七夕飾りには、子ども達の願いが込められていた。「おじいちゃんの病気が早く治りますように」祈る短冊に、目頭が熱くなる。広報課の取材を受けた平成7年7月7日は、伊勢町図書館のオープン記念日であった。

この日、「金曜シネサロン」が再開された。文化・レクリエーションの機会が少ない時勢の中で、又一つ潤いの泉が湧き出る。

夏の子ども向け行事「人形劇の会」（7月23日）と「夏休み折り紙教室」（7月26日・27日）は好評であった。

3 そのほか

災害対策本部の「応急活動実施状況調査」に協力し、報告を提出した（7月27日）。（8月30日には防災訓練が実施された。）

4 資料

(1) みんなの本だな7月号巻頭言

◆ 心の復興へ 一步一步 ◆

図書館システムの再生。私たちは、日々同じ作業を積み上げていきます。図書館にルーティン・ワークは避けられません。同じことの繰り返しに見えるこの経験を通じて、よりよいサービスの技と心を養っていきます。

私たちは気づき始めています。行政サービスとは、物の提供のことではないのだと。物を介することは必要だけれども、実は心を捧げているのだと。

金曜シネ・サロンが復活します。

(2) みんなの本だな8月号巻頭言

◆ 非常時を支えた文化への投資 ◆

芦屋市立図書館は、基本的な構造と機能を損なわれることなく、静かなたたずまいを見せている。それが、避難所の役割と、3月からの運営再開を可能にした。

ゆとり、遊び、贅沢に見えることが、実は必要な投資である場合がある。芦屋市の文化行政は、それを見抜く目を持っていたのである。市民のみなさんが「自分の震災史」を試み、街の創造に参画していく拠り所として、図書館は奉仕し続けるのである。

第6 「稔りの秋を迎える」 —平成7年秋（9月・10月・11月）—

1 「答申」と「提言」

芦屋市立図書館協議会の開催は、この年度2回と限定されていた。8月30日に続き、9月4日、第2回協議会が開催された。3月30日に提出された答申は、人・本・施設の3要素について芦屋市立図書館の将来像を示していたが、この日、このうち特に「施設」に焦点を当て、「提言」をまとめられたのである。すなわち、文化復興を見越して、図書館南北2拠点方式を明確にし、JR芦屋駅周辺に北部の拠点を、と提言されたのである。10月7日の教育委員会協議会において、「答申」と「提言」の趣旨説明が行われている。

これを受けて、社会教育部（図書館）は図書館システムを立案し、「北部図書館設置計画書」をまとめた。行財政の緊急事態の下、「北部図書館設置計画」そのものは採択にならなかったが、その発想を生かして、大原分室を充実することが望ましいとされたのである。

2 行事

年中行事になっていた「親子で楽しむお話の会」は復活し、11月5日に開催された。図書館秋の講座も取りやめることなく、11月8日と21日に開催された。

例年春には、副読本で学んだことを実地に知るため、そして図書館利用を身につけるため、小学校3年生の図書館見学が行われていた。しかし、この年の5月は、これを実施できる状態ではなかった。とは言え、なんとかして今年の3年生も歓迎したかった。図書館側と学校側、双方の熱意が実り、見学会は10月から11月にかけて実現したのである。

地元神戸新聞社主催の「パネル写真年末巡回展」は、この年、どこにも会場を見い出せない苦境にあった。それも今回のテーマは「阪神大震災」であり、多くの人々に見てもらいたい意味があった。相談の結果、芦屋市立図書館を会場にすることとなり、11月28日-30日に開催されたのである。この展示会は、図らずも1月に図書館が主催することとなる震災展の前奏曲となった。

3 市民協力

公民館グループが芦屋市立公民館と共同主催する「本の交換会」は、ようやく定着しようとしていた。回を追うごとに好評で、集散する本の量も増える一方である。芦屋市立図書館もこれに協力してきたが、期間中に行われた交換会記念の「ティタイム・セミナー」（10月16日）にも、図書館から出講した。

なお、震災により臨時休室していた公民館図書室は、9月1日に再開した。

「折り紙教室」も歴史のある行事であったが、とくに震災後、多大の課題をかかえる図書館にとって、継続することが困難な行事であった。ここでも又、市民

の熱意が盛り上がり、この人気高い行事は、講師・世話人のボランティアによって、自主運営行事として甦ることとなったのである。（再開の日、9月13日。）以来、従前と変わらぬ活況を呈している。

4 激励

作家の村上春樹氏は、芦屋市立精道中学校の出身者である。旧図書館（現打出分室）の熱心な利用者であった氏は、出身地の大地震の報に接し、激励のため、出版社とともに、自作作品の朗読会を企画されたのである。発表後すぐに満席となった朗読会は、9月10日（日）午後、地元の芦屋大学で開催され、好評であった。この日の午前中、伊勢町の新図書館に来訪、9月10日は芦屋市立図書館にとって記念すべき日となった。

同じ精道中学校出身で市内在住、ご家族ともども図書館の熱心な利用者である映画監督の大森一樹氏からも、激励を受けた。ロードショー前の自作最新作品の特別鑑賞会を企画され、11月8日、JR駅前「山村サロン」で開催され、自らもスピーチを引き受けるなど、会の成功に寄与された。

両氏とも売上金に自らも積み上げられ、「図書館資料の充実」のためにご寄贈くださったのである。

5 来訪

11月はなんと多くの人々の来訪を見たことであろう。

兵庫県教育委員会の「避難所となった社会教育機関実態調査」のため、委託を受けた大学研究所のメンバーが来館した（11月25日）。独自に震災時の「避難所経営」を調査する京都の大学の研究室からも来館した（11月27日）。

関東地方の自治体から防災研究チームが来芦し、図書館を拠点に調査活動に従事された（11月10日）。

11月24日には、逆に芦屋大学を訪問した。芦屋市教育委員会社会教育部が、かねてから「市民公開講座」のために多大のご協力を頂いているところであり、丁度寄贈する図書もあったので、図書館長が小笠原暁学長にお会いし、双方の図書館の交流など相談したのであった。

ハートフル公社が主催する「福祉調査団」がスウェーデンを訪問したさい、ホームステイした先が、チェーピング市立図書館のセーゲルシュトゥルム館長宅であったというご縁で、館長ご夫妻が海外旅行休暇の途次、芦屋を訪問し、是非図書館を視察したいとの意向である。来館された11月29日は、丁度居合わせた小学生たちと交歓するなど、珍しくも有意義な日となった。ご夫妻をエスコートされた市民の方から、翌日図書館に届けられた贈り物「ポインセチア」の鉢植えは、それ以来ずっと赤々と燃えたって、来館者に頬笑みかけている。

11月の末に、八戸市民ボランティア会のメンバーから、自家農園で収穫した林檎の香りが2箱も届けられ、関係の所にお分けできたのも嬉しい出来事であった。

1月に予定する「阪神大震災資料展示会」計画が公表されるや、次々に記者の取材を受けたのも11月のことであった。

6 資料

(1) みんなの本だな9月号巻頭言

◆ 今を自覚する 歴史的な季節感 ◆

2月、3月の空白のあと復活した4月号から、一見季節感のないメッセージを届けて、もはや9月を迎えます。この間、足下に注意して路を拾う毎日が続きました。図書館から北へ伸びるコミュニティ道路をはじめ、日々段差を生じ広げていく歩道に踏まないように、そして行き交う蟻を踏まないように。

震災の厳寒を凌ぎ、復興の炎暑を乗り切る歴史的な季節感を自覚する、息長い文化観を持ちたいと思います。

(2) みんなの本だな10月号巻頭言

◆ あふれる善意に包まれて ◆

再会が待ち望まれていた、図書館の「折り紙教室」が、講師と参加者のご厚意により、自主運営行事として、9月から甦りました。手先の文化を象徴するこの芸術が、この国で脈々と受け継がれて、今、震災復興過程の一つの心の支えにもなっているのでしょう。

何事によらず落ち込みがちなこのごろ、利用のマナーへの協力がむしろふえていくように思えます。そのおかげで図書館が日々運営できる喜びを覚えています。

(3) みんなの本だな11月号巻頭言

◆ 着実に進む国際交流 ◆

船舶の技術要員リカレント教育のため、東南アジアからの85人の留学生が、10月上旬から12月上旬にかけて、呉川町の運輸省立海技大学校で学んでいます。芦屋市立図書館に迎えること5年目、10月12日の見学会のあと毎日のように留学生が図書館を訪れています。

かつての卒業生が、航海中日本に寄港したさい、海技大学校へ大震災の見舞に立ち寄ってくれたという話に、心を動かされます。

第7 「静かな画期」 ー平成7年12月ー

1 コンピュータ・システム更新

新図書館オープン以来8年余、遅すぎたとも言える「コンピュータ・システム更新」が、ついに実現したのが12月でした。図書館利用の需要が伸び続け、特に震災後の文化復興に奉仕する役割があり、片や科学技術が日進月歩している中で、カウンター業務及び内部業務の改善のためのシステムレベルアップは避けられない所まで来ていました。

カウンター・サービスが簡明・迅速になり、端末機処理で長引いてお待たせすることがなくなりました。利用者自身で操作できる端末機（愛称「Qちゃん」）も、2台から4台に増えました。システム更新によって同時に、機械のトラブルから自由となり（安全性）、内部の機械操作が確実となり（自動性）、将来の発展に備えて性能も向上する（発展性）など、格段の改善がもたらされました。1日ー18日までの間、臨時休館しましたが、その効果は十二分に発揮されていると言えます。丁度、震災後のことゆえ、例年5ー6月の特別整理期間の休館をしないままに頑張ってきましたが、ほぼそれに見合う期間をもって、12月に大改善を達成し得たこととなります。

2 大原分室充実への期待

芦屋市立図書館協議会の「答申」「提言」が示した「北部の拠点」の重要性に関連するできごととして、市議会にも動きがありました。12月本会議の一般質問の形で、「大原分室の充実」に関する要望が出され、教育委員会側はこれに対し、「可能な限り努力する」旨の応答をしたのでした。

動乱の年が、静かな画期をもって、締めくくられようとしていました。

3 資料

(1) みんなの本だな12月号巻頭言

◆ 震災を振り返ることと 前へ進むこと ◆

人の心に消すことのできない傷を残すできごとがあり、ひとつの社会に試練をもたらす災害や戦争のようなできごともあります。大きなできごとを「風化させない」ために、そのすべてを半永久的に引きずって行くことは不可能なのですが、「済んだことは忘れてしまう」というのは、一種の精神的退廃でもあります。では、どのような姿に再構成して教訓として残すのでしょうか。その営みの中に、その社会の文化の深さと広さが写し出されます。阪神大震災を記録する試みが、本の出版や、図書館の震災コーナーのような形で続けられています。街の復興、「芦屋らしさの再生と創生」のために、みんなで力を合わせて、「震災メモリアル」を形成するこ

とが大切です。芦屋市立図書館は、その端緒として、図書資料の収集にあたる機能と役割に見合って、「震災資料展」を開催します。期間中の会場案内のボランティアを歓迎します。

12月は新コンピュータシステムを導入するための臨時休館があります。本の貸出や検索が速くなるなど直接のサービスが向上するだけでなく、内部機能の改善によって、よりよい経営ができますから、間接的にもサービスが向上することになります。時代の最先端の技術を導入し、心をこめて奉仕するのが図書館の願いです。

(2) 広報あしや95年12月1日号

大森一樹監督作品の
チャリティー上映会

去る十一月八日、このほど芦屋市民文化賞を受賞された大森一樹監督の映画「緊急呼び出し/エマーシオンコール」がラポルテの山村サロンで上映されました。

この映画は、フィリピンのマニラで初の日本人医師となった原作者の実体験を基に、貧困のなかでたくましく生きる人びとと、彼らの治療にあたる主人公の姿を描いた、大森監督の最新作です。

山村サロンでの上映会には、雨にもかかわらず百人を超える人びとが訪れました。また上映に先立ち、大森監督から舞台あいさつがあり、震災と撮影の日程が重なったことなどの苦労話が披露されました。

そして、大森監督から上映会の収益金十万円が、十一月九日、市立図書館に寄付されました。

なお、この収益金は図書館の映像資料の充実のために使われます。



(3) 読賣新聞

95年12月8日記事



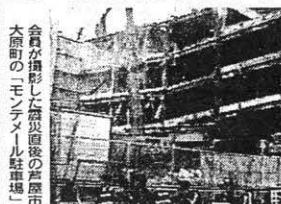
完成ビデオを覗き見る田中さん

芦屋のグループが上映会
燃えるマンション/炊き出し...

1月16日から市立図書館

芦屋市内のビデオ愛好家でつくる「芦屋ビデオクラブ」大を来でつく「震災直後の市内の被災状況」を制作したビデオが市立図書館で1月16日から市立図書館で公開される。

約一時間の作品。燃えているマンションや、1R芦屋駅前前の焼いた駐車場、芦屋駅の液状化現象、炊き出し風景が市内全蔵の被災状況を細かく写し、ありのままの姿を捉えている。ナレーションは、時折撮影者が抱いた感想を言だけ、ヘリコプターの機音や緊急自動車のサイレンなどが震災直後の緊迫した様子を伝えている。公共建築物は、震災直後の芦屋市に、町名の住居表示が入れられ、町名の住居表示が入れられてわかりやすくなりました。



震災直後は、千八百まで、震災関連の図書や資料が市立図書館に寄贈された。震災直後の市内の被災状況を捉えている。公共建築物は、震災直後の芦屋市に、町名の住居表示が入れられ、町名の住居表示が入れられてわかりやすくなりました。

震災直後の様子ビデオで再現

芦屋市を中心とした震災直後の様子を再現している。震災では、被災者だけでなく、金銭的に余裕があったが、金銭的に余裕があったが、一部被災者の被害を受けた。約一週間の連絡を取り合っており、震災直後に撮影された。震災直後に撮影された。震災直後に撮影された。震災直後に撮影された。

第8 「一周年のメモリアル」 ー平成8年1月ー

1 震災展

(1) 図書館への期待

震災一周年のメモリアル・イベントは、行政・民間の手で、いろいろと展開された。その中で、最も総合的で、長期間で、立体的に構成されたのは、芦屋市を代表する形で開催された図書館の展示会であった。

図書館は震災資料を収集する任務を本来有しており、震災即日から鋭意取りかかっていた。そこへ教育委員の方々から、「震災資料コーナー」を設置するよう強いお奨めがあり、これを受けて、まず一周年記念展示会を実施し、以後「震災資料文庫」を設置することとしたのであった。

1月16日から28日まで、2階集会室を主会場として開催された展示会は、入場者1800人。災害を風化させることなく、記憶に止め、復興へ反転していくさざ波を起こす場となったのである。

(2) 協力

準備に当たっては、次のような貴重なご協力が寄せられた。

ア 「アシャビデオクラブ」は、震災直後から街に出て、全市くまなく災害状況を記録する活動を続けられた。震災展に当たっては、これを1時間の作品に編集され、期間中主会場で終日放映されたのである。

イ 兵庫県立芦屋高等学校では、6月時点の統計をもとに、間口3メートル、奥行4メートルの被災状況立体模型が完成していた。期間中、図書館入口の「エントランス」に展示されたこの大型模型は、入場者の関心を呼び、その後も、他市でのプロジェクトに活用されたのである。

ウ 11月末神戸新聞社主催年末巡回展の展示作品の中から、芦屋関連作品を中心に提供を受け、主会場で展示された。

エ 震災当日の号外や被災状況掲載雑誌など、個人所有資料の提供があり、展示物に厚みを加えることができたのである。

オ 市広報課はすでに、震災関連写真パネル作品を作成しており、これを図書館エントランス、階段、2階ロビーに展示した。

カ 八戸コミュニティ・ボードから「三陸はるか沖地震」被災状況資料の提供を受け、主会場内に「八戸コーナー」を設置した。

2 八戸交流事業

(1) 再会

八戸コミュニティ・ボードとは、その後も、友好関係が継続されていた。そして、双方の震災一周年を期して、交流事業が行われた。すなわち、期日を阪神大震災に合わせ、八戸市が芦屋市を訪問する形で実現したのである。

(2) 交流会

[前日] 夕刻、工藤会長を団長とする八戸コミュニティ・ボード代表団 8 人到着。すぐに北村春江芦屋市長を表敬訪問。市長応接室で、17:15~17:45、この 1 年を振り返って懇談。

[17日] 午前 市内復興状況視察。

昼 元図書館避難所入居者の新築なったお宅を訪ね、歓談。

午後 図書館会議室で交流会。報道機関取材多数。震災展視察。

[翌日] 帰路。

(3) 記録として

ア この事業は、庁内各課のご協力を頂いたが、宿泊・送迎・案内・交流など、芦屋市側としてのお世話は、図書館が担当した。

イ 代表団には地元新聞「東奥日報社」の記者も同行して取材に当たり、交流事業は青森県下に報道された。

ウ 代表団一行は交流記念に八戸市民の木「いちいの木」を届けられ、市長のご配慮で、芦屋市立図書館パーキング敷地内に植樹されることとなった。

3 市民の協力

(1) 生け花

一般開架室北側窓辺に静かな佇まいを見せる花は、毎月市民の方がボランティアで活けてくれているものである。震災で中断していたが、19日から再開して頂くことになった。

(2) クリーン作戦

図書館がある伊勢町の自治会では、自分たちの街を大切にする取組みの一つとして、図書館敷地のクリーン作戦を実施することを決定され、早速 1 月から始められた。

4 そのほかのこと

(1) 教育委員の訪れ

平成 8 年に入って最初の教育委員会は、1 月 19 日（金）会場を文化ゾーンに移して、美術博物館で開催された。隣接する図書館では、教育委員長から強いお褒めのあった震災展が開催中であり、委員の方々は会議に先立って、これを視察されたのである。

(2) 図書館協議会の委員懇談会

芦屋市立図書館協議会は、夏の間すでに年間 2 回の開催予定を終え、「提言」を提出しておられたが、1 月 27 日、委員の方々のご好意により、「委員懇談会」が開催された。「提言」以後の図書館運営について報告し、助言をいただいたあと、新年度から就航する新しい自動車文庫の愛称募集のことで、応募作品の選定について方向づけをしていただいた。

(3) 館内禁煙

公共機関として、かねてから禁煙について意を用い、すでに2階ロビーの喫煙席は止めて、館内喫煙は1階エントランスのみとしていたが、1月30日を期して「館内全面禁煙」に踏み切った。喫煙は、東玄関外側のスペースに限定することにしたが、利用者のご協力を得て、その後順調に推移している。

4 資料

(1) みんなの本だな1月号巻頭言

◆ 震災に学ぶ 知恵の子年に ◆

“今享受している地球環境は、祖先から譲り受けたものではなく、われわれの子孫から預かっているものである”アメリカのある巨大企業の会長の慧眼。森林を伐採して洪水を惹き起こし、利便に走ってオゾン層を破壊するようなことは避けるべきだ、と言うことは言える。しかし、日々の生活が地球環境に与える結果を見抜く“知恵”を本当に持ち得ないなら、子孫にお返しすることは危うい。

その知恵の宝庫は、目の前にあるのに。

(2) 震災展チラシ

M7.2がもたらしたもの ～阪神大震災 資料展示会～

芦屋市立図書館
芦屋市伊勢町12-5

あれから1年・・・
それぞれに忘れ難い、あるいは忘れたい思いを抱いて歩んだ日々。震災体験を風化させず、自分の震災史を刻む営みの一つゆがに、共通の広場として「震災資料展示会」を試みます。今後、幅広い協同により、壮大な震災メモリアルが形成されることであらうと見込んで、1周年に際し、資料の収集に当たる図書館の役割を見合って、準備を進めて参りました。
街と文化の復興と創生が、市民の皆様のあふれる情感によって支えられますように。

日時 平成8年1月16日(火)～28日(日) 10時～17時
ただし1月22日(月)は休館日です

会場 芦屋市立図書館 2階 集客室

内容 1. 震災関係 図書資料
2. 市内被災状況模型 (兵庫県立芦屋高等学校 提供)
3. 市内被災状況記録フィルム (ビデオクラブ 提供)
開館中 会場で放映
4. その他 各方面から寄せられる資料

(3) 震災展来館者へのメッセージ

【震災資料展 挨拶文】

(エントランス 及び 2階集客室 に
同じものを掲示。)

マグニチュード7.2がもたらしたもの ～阪神大震災 資料展示会～ (1月17日～28日)

あれから1年・・・
それぞれに忘れ難い、あるいは忘れたい思いを抱いて歩んだ日々。震災体験を風化させず、自分の震災史を刻む営みの一つゆがに、共通の広場として「震災資料展」を試みます。今後、幅広い協同により、壮大な震災メモリアルが形成されることであらうと見込んで、1周年に際し、資料の収集に当たる図書館の役割を見合って、準備を進めて参りました。
街と文化の復興と創生が、市民の皆様のあふれる情感によって支えられますように。

平成8年1月16日

芦屋市立図書館

(4) 震災展八戸コーナーについてのメッセージ

八戸コーナーについて

青森県八戸市は、阪神大震災に際し、4次

にわたる救援隊を芦屋に派遣し、芦屋市立図書館を拠点として、心暖まるボランティア活動を展開されました。

八戸市自身が、平成6年12月28日(阪神大震災のわずか3週間前)、「三陸はるか沖地震」(M7.5)に見舞われ、多大の被害を被っていました。

救援は迅速かつ大規模で、その活動に接した人々は感動せずにはいられませんでした。

しかもこれが自治創造団体「八戸コミュニティ・ボード」の呼びかけで急速結成された「八戸市民ボランティア会」によるもので、行政によらない民間活動として展開されたのです。

都市と都市の、人と人の連帯の中で復興再生を期すために今後交流を深めようとしています。

(阪神大震災1周年にあたる1月17日「八戸コミュニティ・ボード」代表8人の来訪を受けて、芦屋市立図書館で交流会を実施)

芦屋市立図書館
館長 下橋洋一 様

八戸市立図書館
館長 澤田 信



(5) 震災展への八戸市立図書館長メッセージ

平成八年一月十七日

今年には斜年になく降雪が多く、西日本の雪害も報じられておりますが、被災された方々ほどのようにお暮らしかと忍ぶと胸が痛みます。早いものであれから一年、あまりにも大き過ぎた犠牲に驚くと共に、家族、職場、地域が力強く復興に立ち向かう姿と、その団結力のパワーに感動した一年でもありました。

特に東奔西走なさっている市民の方達、その時の正確な証言と記録がたくさん出版されたことは、私たちに深い示唆と教訓を与えてくれました。私達皆様が方から発信されたこれからの教訓を理解することが、お互いのさすなをより深くしてくれらるることと確信いたします。

八戸コミュニティ・ボードのボランティア活動の中から生まれました。貴館と当館との交流が、今後動も早い復興を祈念いたします。

(6) 広報あしや96年1月1日号

マグニチュード7.2がもたらしたもの 阪神大震災資料展示会

震災関係図書資料や市内被災状況模型(県立芦屋高校提供)の展示、被災状況記録フィルム(ビデオクラブ提供)の放映など。入場無料。

日時 1月16日(火)~1月23日(日) 午前10時~午後6時(土日は午後5時)

会場 図書館2階集会室 問い合わせ 図書館 ☎31-2301

震災から1年
復興への
誓いを込めて

自動車文庫巡回場所・時間の変更

1月からの巡回は次のように変わります。

- ①山手幼稚園西、毎週水曜日 10時30分~11時30分
- ②打出分室前、毎週水曜日 13時15分~15時15分
- ③朝日ヶ丘市民プール前、毎週木曜日 10時30分~11時30分
- ④西山幼稚園前、毎週木曜日 13時15分~14時15分
- ⑤三桑公園前、毎週木曜日 14時30分~15時30分
- ⑥朝日ヶ丘集会所、毎週金曜日 10時30分~11時30分
- ⑦甲南公園前、毎週金曜日 13時15分~14時15分
- ⑧「ロイヤル芦屋翠ヶ丘」北、毎週金曜日 14時30分~15時30分(図書館休館日は巡回は休み)

問い合わせ 図書館 ☎31-2301

第9 「禍を転じて福となす」 ー平成8年2月・3月ー

1 ライブラリー・サロン

子どもも大人も、心の癒しと安らぎを求めている。社会教育部の事業「子育てセンター」に関わる人達を中心となって、自主的な子育てグループが活動していた。長じて本好きな市民となるため子どものときの「お話」の大切さ、震災からの心の復興の大切さの理解において、グループと図書館の気持ちは一つであった。こうして2月から、毎週水曜日の自主事業「子どものためのお話の世界ーライブラリーサロンー」がスタートした。紙芝居、人形劇、遊び、語らい、相談と、多彩な内容に魅せられ、水曜日の午前中、図書館の集会室は、回を追って盛況である。

2 メモリアル・サイトの整備

新図書館オープン時、図書館敷地の東北隅に、芦屋ライオンズクラブから、メモリアル「午前10時のメッセージ」をご寄贈いただき、その後雑草の除去など維持管理にご配慮いただいていた。そしてこのたび、震災後の環境整備を計画され、メモリアル・サイトの芝生敷きは、2月21日に完成したのである。

3 本の交換会

公民館及び公民館グループ「文学同好会」が主催し、図書館が後援する「本の交換会」は、すっかりお馴染みとなり、好評を博している。第3回目は、3月4日ー8日に公民館で開催され、図書館も例によって図書を寄贈するとともに、関連事業「ティータイム・セミナー」に図書館長が出講するなど協力した。

4 レポート

大震災に洗われ、避難所を経営し、図書館運営を早期に再開し、次々と新しい展開を見せる芦屋市立図書館に、世間の関心が寄せられていた。報告を求められる件数は五指に余っていた。すでに災害対策本部へのレポート、単行本への寄稿は提出済みであった。2月には、ボランティアについて教育委員会の刊行物に報告し、兵庫県教育委員会の「避難所となった社会教育機関に関する記録作成」に協力するところがあった。

3月は、阪神地区公共図書館協議会・兵庫県図書館協会・日本図書館協会の記録集あるいは特集のための報告作成作業が目白押しであった。

震災以来、復興過程の節々に報道機関の取材を受けたが、2月13日にはローカル紙「あんてな」の、復興著しい図書館の姿について取材があった。

5 「阪神大震災一周年展」

1月に芦屋を再訪された八戸コミュニティボード代表団は、芦屋市立図書館における震災展を視察したことにより、一つのプランを胸に抱いて帰られたが、それは次のような姿となって現れたのである。

名称 阪神大震災一周年展
内容 三陸はるか沖地震による八戸市の被災状況 及び
阪神大震災の被災状況
期間 3月15日ー3月19日
会場 八戸市立図書館

われわれは、その構想と命名に驚き、又啓発されたが、メッセージ・資料等を送り届けて、その成功のために協力した。

6 新しい酒は新しい皮袋に

移動図書館＝自動車文庫は、平成8年度からの運行に備えて、新車が準備された。新文庫車は、市民から応募のあった60点余の作品の中から、図書館協議会の方向付けと、教育委員会内の決定手続きを経て、「ときめき号」と命名された。

3ヶ月あまりの中断の後、ようやく再開されることとなる文庫車の巡回である。本も新しいものが積み込まれる。「今日はどんな本に出会えるのだろう」と、どきどきしながら心待ちにする、利用者の気持ちが表れている。4月からの巡回を控えて、3月中に、「ときめき」GO!の試運転が行われた。

7 打出分室の再開

一日も早い再開を期して準備を進めてきた打出分室。打出教育文化センターの修復がなり、部屋が図書館側に明け渡された後、図書室のクリーンアップ、図書の運び込みなどの作業を経て、遂に3月27日、再開に漕ぎ着けたのである。

8 新生

一年余の、事態・努力・成果を振り返るとき、感無量である。平年に数倍する働きの経験は、意図してできることではない。職員の能力・適性が活かされたのであり、実に多くの人々の顕在・潜在の協力が与えられたのであることを、記憶に留めなければならない。そして、努力と協力の根底に、天慮が働いたのであることも。

9 資料

(1) みんなの本だな2月号巻頭言

◆ 八戸市と1周年の交流会 ◆

①12月28日の「三陸はるか沖地震」で多大の被害を受けたにも拘わらず、②その

3週間後の1月17日に「阪神大震災」が発生するや、4次にわたって芦屋市立図書館を拠点に大救援活動を、③それもすべて「市民ボランティア会」の手で展開した青森県八戸市。

1周年に当たる今年1月17日、その代表団8人が芦屋市を訪れて交流会。街と文化の復興と創生に、都市と都市、人と人の連帯。

(2) みんなの本だな3月号巻頭言

◆ 残影深く されど光はあり ◆

損壊の整理が進み、見掛けの上で落ち着きを取り戻しているかに見える被災の街は、人身と家屋の崩壊の影を心の中に残して、長い甦りの道程を歩もうとしている。このとき開催された「阪神大震災資料展示会」(1.16~1.28芦屋市立図書館)は、参観者1800人、災害を想起し、復興へ反転するさざ波を起す場となった。子の心を癒し、自らの生涯学習に赴く動きは、すでに図書館を巡ってある。

(3) 八戸市「阪神大震災一周年展」へのメッセージ

八戸市民の皆さまへ

芦屋からのメッセージ

阪神大震災から1年余、災害の模様をご覧いただく機会が訪れました。思い返せば、昨年の1月から8月にかけて、コミュニティボードによる「八戸市民ボランティア会」から手をさしのべていただき、私たちは再び生きる道を歩み始めたのでした。天災に見舞われた街と街が、あい携えて甦ることを、心から念願しています。救援活動と一周年展に感謝します。

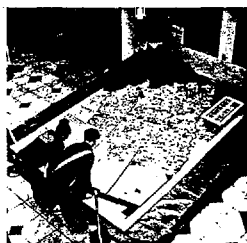
平成8年(1996)3月

芦屋市立図書館

(4) 広報あしや96年2月1日号記事

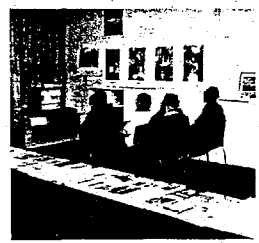
この展示会には、期間中約千八百人の人々が訪れました。

会場を訪れた大仁克子さん(伊勢町)は、「骨折をして、五カ月間入院していたので、このような市内の情景の写真を目の当たりにするのは初めてです。今日は涙がでました。また、奥田幸子さん(西麻町)は、「一家の被害は、それほどでもありませんでしたが、この写真を見てあらためて当時を思い出しました」とそれぞれ感想を話していました。



一月十六日から二十八日までの間、図書館で阪神大震災資料展示会が開催されました。展示会では、震災当日の新聞の号外や、震災に関する本などの出版物・地図など約二百点が展示されたほか、県立芦屋高校の生徒が制作した市内被災状況模型の展示と、ビデオクラブによる被災状況フィルム等の放映も行われました。

■阪神大震災資料展示会
■マグニチュード7・2
がもたらしたもの

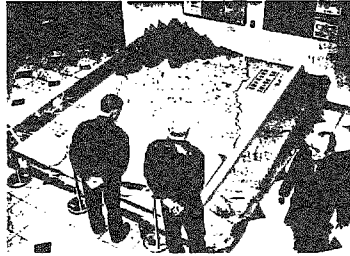


被災地間に 真心のつながり

～八戸市との1周年交流会が実現～



■ 忘れぬ日！
心算にしていたものの被災地に届けられぬという喜びで、まじりなく涙もろさが伝えられたという喜びでした。
数多い避難所の中でも、国費館に入宿していた人たちは、二月二十九日(日)、はじめてまたかき食べ物に恵まれたのでした。青森県八戸市民ボランティア会の代表一平さん、



被災地交流のわすか、翌朝、年もおしまった二月二十八日、あの

■ 被災地がたがはる
市民自治創造グループ「八戸コミュニティポード」では、阪神大震災の報が伝わるや、熱気が沸きはじめました。
「傷の浅いものが深手を負った人を助けるのは当然だ」と、言が決め手でした。
地震発生、日時には決断、すぐさま八戸市民に呼びかけ、十日には第一陣が出発。日夜をかけて走り続け、片戻に駆けつけてくれたのです。
阪神大震災のわすか、翌朝、年もおしまった二月二十八日、あの

いじりした

「陸はるか沖地帯」で、多くの損壊を被ったあたりに、
■ 自分ごととして
第四種まで都合四十人、それをうしろを支える教育人の大根拠をまっしぐら、プロジェクト活動した人、企画した人、参画した人、行政の支援をたのむことなく、全く自ら準備し、困っている人のところへ赴く、そして回を造ることに、被災地の心に届くように進められた。避難所となった国費館を拠点に展開された、教育活動に活動を支える人はいらっしゃいません。
一日の作業を終え、夜更け出しに参画した八戸市民への「ありがとう」といきました。お話しになりました。上の代表者の話に、胸を打たれる思いでした。

■ 両会の日
双方の震災後、やがて一年がたとうとしていました。忘れ得ぬ人々の内会の気運が高まりました。期日も片戻の、一年に合わせ、工藤・八戸コミュニティポード会長はじめ八人の代表団が参加されました。
八戸市長からのメッセージを携えて北村市長を訪問。片戻市内の復興過程を見学した後、折から国費館で開催中の「阪神大震災資料展示会」を視察。
三浦教育長も出席し、なつかしい人々との再会となった交流会では、往時の様と復興状況が話題となり、災害の対策や支援が語り合われました。当時の避難所入居者の家を訪ねて感謝する機会があったのも、うれしいことでした。

■ 二つから！
まわりの活動を後した人たちの交流が、今後も続けられるの志を感したこのたびの交流事業でした。懇話会する市役所庁舎に、避難所のある小学校に、心をこめてボランティアの花を送り届けた人々も、と首は思い出していたらどうしようか。

あとがき

われわれは、「南仏プロヴァンスの12ヶ月」を楽しんでいるような時期にいたわけではない。しかし、「芦屋市立図書館の14ヶ月」は、単に苦しみにひしがれていたのではなく、再生の芽を萌え出させる努力を重ねていたのだと、今は言える。

文化の記録を収集・保存し、適切に編成して利用に供するという図書館の本性そのままに、自らの体験を客観化し、自らの実態の中に普遍を見出す営みとして、この記録の編集を試みたのである。平年に倍する業務があつて、専らこの作業に従事できるわけはなかったから、記述も資料も十全ではない。しかし、後日あるいは後年、この中から何か参考にするものを積み込むことはできたと考えている。

この間の職員の気持の動きは、記録としても大切な要素であり、そのため職員を代表する形で、整理係長が「わが魂の軌跡」として、自らの心理過程・学習過程をまとめてくれたのである。これをも収録して、この記録にふくらみを持たせたかったのであるが、かなりの分量となっていること、又、論文として単独でも発表に堪え得る内容であることから、このたびは、これを割愛したのである。他日、何らかの形で陽の目を見ることを期待している。

この記録は、震災以来14ヶ月という時間を対象とし、平成8年3月という年度末時点に成立している。対外報告作成作業を優先したこと等の理由によって、実際の出来上がりが平成8年度にずれ込んだことについては、ご理解をお願いしたいと考えている。

最後に改めて、市民の方々と行政機関各方面から頂いた支援に、深甚の感謝を申し上げる。

平成8年3月

芦屋市立図書館長

下橋 洋一

図 書 館 年 報

1996年3月発行

発行 芦屋市立図書館

編集 芦屋市立図書館

印刷 芦屋市総務部総務課印刷室